

Ⅱ. A.ソローキンの相互作用論 —『社会学体系』第4章を中心に—

吉野浩司

はじめに

ここでとりあげるのは、20世紀前半にロシアとアメリカで活躍した社会学者ピティリム・アレクサンドロビッチ・ソローキン(1889-1968)のロシア時代の主著『社会学体系』¹⁾(以下『体系』と略記)である。本書をとりあげる理由のひとつは、まずソビエト成立以前のロシア社会学研究の希少性ということがある。ソローキンをはじめとする革命以前の社会学者は、これまでロシア国内でもあまり論じられてこなかった²⁾。他方、アメリカではソローキンの評伝がジョンストンによって刊行されはしたが、やはりロシア時代のソローキンの著作に関しては素描にとどまっている³⁾。こういうことからロシア時代の主著ともいえる『体系』を検討してみようと考えたわけである。

それではなぜ、特に本書の第4章「相互作用の要素分析」に着目したのかについてもひとことしておこう。筆者はこれまでソローキンの社会学を、彼のいう「統合主義(integralism)」という観点から整理してきた⁴⁾。その研究の延長線上に、ロシア時代における統合主義の萌芽が本章の相互作用論としてあらわれているのではないかという想定があったからである。

なお『体系』についていえば、かつてイサジュが紹介したことがある⁵⁾。彼はそこで『体系』には「ソローキンの現在の社会学にある特質のような、価値に対する強調はなく、要するに初期の社会学は、少なくとも表現にある限りでは、多くが行動主義的、ことによると機械論的な傾向をもつ」⁶⁾と評した。ソローキンはイサジュのこうした評価にたいして反論の手紙を書いている。

本書〔『体系』〕では後の拙著よりも行動主義的、物理学的方法に強調が置かれているのは間違いない。しかし本書においても私〔ソローキン〕は

一面的な物理論や行動理論を鋭く批判し、しかも内観法さえも駆使した人間の心理的経験の研究が重要であること、あるいは心理社会的現実の十全な把握に、この方法が重要だということも繰り返して述べている。⁷⁾

ソローキンはこの反論において、自らの立場の不変を主張したのであるが、その正当性については、これから本稿で明らかとなるであろう。もしかりに彼の立場が一貫しているとするならば、その方法論の視座というのは、アメリカでの研究においてさらに精緻化され、体系された統合主義と等しいものになるだろう⁸⁾。そういう論点を念頭におきながら、ここではロシア時代とアメリカ時代の考え方の本格的な比較を行う前段階として、ひとまず『体系』を詳しく解説することにつとめた⁹⁾。

1 最初の社会学像

1-1 「社会学の境界と主題」について

はじめに『体系』の読解作業に入る前に、ソローキンは自らの社会学観をはじめて発表した、1913年の論文「社会学の境界と主題」を見ておきたい。これはのちにソローキンのロシア時代の代表作となる『罪と嚴罰』¹⁰⁾と『体系』の方法論を論じた個所に一部載録されていることから、かなり気に入っていた作品であったことがうかがえる¹¹⁾。冒頭で彼は社会学の対象は相互作用をおいてほかにないことを断言している。

社会学者が社会的あるいは超有機的な現象の本質を特徴づける手段である定義がどんなに多様であっても一もつとも、それらの定義はすべてなんらかの共通性、すなわち社会現象は社会学者の対象であるという共通性をもっている一、なによりも第1に存在するのは、なんらかの中心となる相互作用、つまり固有な指標をもつ相互作用である。相互作用の原理こそ、これらすべての定義の基礎にあり、この点であらゆる定義は一致するのであり、その相違があらわれるのはもっと先のこと、つまりこの相互作用の性格と形式を定義する段階においてである。¹²⁾

ソローキンは社会現象の過程が相互作用にほかならないというこの主張を、ジンメルやタルドといった心理学主義的社会学の色調の強い論者によって補強しながら、さらにその主張、すなわち相互作用の原理が容認されるために解かなければならない2つの問題を提起する。

ひとつは相互作用の仕方や過程の説明、もうひとつは、相互作用の持続は社会現象の概念にとって重要であるのか否かという問いである⁸⁸。ここでソローキンは相互作用の内容を明らかにすることで、社会変動の説明と原因の究明、あるいはその重要性を論じようとしているのである⁸⁹。そしてさらにこの問題に答えることができるかどうか、社会学の独自性の有無はかかっていると念をおす⁹⁰。

彼によれば、これまでに提示されてきた解答は大きく3種類にわかれる。第1は人間であれ動植物であれ、相互作用しているのであればなんでも盛り込もうとするもの。この定義は他のどれよりも一般的であり実際的な概念である。これよりもう少し特殊なものが第2種で、社会現象は「心理的相互作用」(психические взаимодействия)であると定義されている。心理主義がこれにあたり、ここでの相互作用は論理的関係という特色をもつ。そして第3の種類は、相互作用ないし社会現象に外的压力(внешнее принуждение)がかかっていると規定している。これは社会学主義に相当するものであろう⁹¹。ソローキン当人はどれを選びとるのかといえ、これら3つをすべて含むことのできるという理由で第3の立場にたつ。

さて以上のように社会現象は相互作用であると説明することができ、またそのさい相互作用も第1の実際的観点と第2の論理的関係の観点を相補うようなかたちで論じていくことが社会学のあるべき姿であることが明示された。さてそこで社会学独自の見解と、第2種の心理主義の論者が依拠してきた心理学の立場のあいだをとりもつやり方について、社会学者の間ではひとまずの共通認識が成り立っているという。それは以下のとおりである。

集合心理学あるいは社会心理学という概念をこのように手短かに展望してみると、結果は以下ようになる。1) この心理学が独自の課題として人間間の相互関係と、こうした相互関係のなかで生じる、さまざまな現象の、あらゆる基本的な形を研究しているものと同じであるならば、明らかに社

社会学は心理学と合流し、ふたつの名称のうち、ひとつが余計になる。どちらが余計だろうか。まったくどうでもいいことだろう。というのも、問題は学問の名称ではなく、学問の内容だからである。この場合、私は社会学という名称を選びたい。2) 集合心理学あるいは社会心理学という名称が、シゲール、グラッセリ、タルド、ロッシ、スクイラシらの学者が使っている意味と同じであるなら、あきらかに人間の間の相互作用のありとあらゆる基本的な形を研究する学問としての社会学の指導者となるだろう。⁹⁾

さて本論文が発表されたのは1913年であり、この時代のロシア社会学は心理学に大きな期待を寄せていたことがこの引用からもうかがえる。それにデュルケムはもちろんのこと、タルドやルボンの学説の浸透も相当なもののように感じられる。その一方で、いささか論旨をおいにくいこの論文を、ソローキンが「心理学と社会学の関係に関する論争は決着をみていない」と結ばなければならなかったように、彼自身も心理の取扱いには手をやいているようにみえる。その意味で上の文章は、ソローキンのどっちつかずの心境をよくあらわしているといえるだろう。これに決着がつけられるのが1920年の『体系』である。そしてこの問題は心理学と社会学との関係という問題、そしてそれをこえて、学問における主観と客観の取扱いというところにまで議論はおよんでいく。はたしてソローキンはこの議論にどのような結論をくだすことになるのであろうか。

1-2 『社会学体系』の成立

さてそれでは「社会学の境界と主題」から『体系』へと彫琢されていく、ソローキンの社会学像、そしてその対象としての相互作用的社会観とはいったいどのようなものであったのかを、これより考えてみたい。さきに残されていた問題は「心理学と社会学の関係に関する論争は決着をみていない」というものであった。これを扱った箇所が『体系』の第3章「人々の相互作用概念とその研究の方法」¹⁰⁾である。社会学の対象を「相互作用と行動」に見定めて、「その結果にかんする科学としての社会学」を志すところまでは、上述の行論とはぼおなじである。しかし本章の第2節「心理的現象研究の主観的方法と客観的方法。心理学と社会学における『主観派』と『客観派』の議論。議論の決着」の題目からもわかるとおり、これはかつて課題として残されていた「心理学と社

社会学の關係に関する論争」の解決に積極的にのりだしたものであった。ソローキンはここで社会学の向かう先について以下の意見を表明している。

おそらくは、将来、厳密で客観的な学問の発達によってそれ〔心理的経験を研究領域から完全に排除すること〕はなしとげられるであろう。少なくとも私個人はそれを望むものであり、科学の進歩がこの方向で進むと考えるのにも根拠がある。しかしながら社会学者が、人間活動の主観的—心理的側面を完全に無視するには、「客観主義」がもたらしたデータは、いまのところはまだきわめて不完全であり、ごくわずかしかない。したがって残すは次の道ひとつだけ。それは心理学的用語の使用を最小限にとどめ、ごく例外的な場合にのみ、なんらかの現象を説明するために主観的—心理的経験の分析に向かい、このような諸現象の研究領域へ可能なかぎりの精密さを導入することである。⁶⁸

ここでいわれていることはこういうことである。社会学が客観的研究へと向かいつつあることは間違いないし、それは必要なことでもある。ところが、これまでの主観的心理学にとらわれつづけてきた社会学の研究は、「心理的实在(психические реальности)」という不確かなことがらを対象としてきた。しかしこれらは、はたからみると感じることも、重さ長さははかることもできない。社会学をもっと厳密なものとするためには、心理的实在ではなしに「心理的行為と心理的経験」の知識が求められているのだとソローキンはいう。要するに「相互作用」として現象化された限りでの「心理的实在」、すなわち「心理的行為と心理的経験」に向かうことを説いているのである。

さてそこで、この「心理的行為と心理的経験」が、実際の社会現象として立ちあらわれてくるのは、外的行為としてである。さらにソローキンはこういう文章を綴っている。

〔…〕人々の相互作用現象を研究するうえで最初の基本的な方法とは、ある人々の行動が他の人々の存在と行動に機能的に依存する事実を、外側から研究する客観的方法でありうるし、またそうでなければならない。ここでは社会学者は外的行為から出発して、それからまた別の外的行為へと進

んで、さらにまた外的行為で終え、それらに関連づけることをまさに強いられている。このいみで社会学は客観的社会学でありうるし、そうあらねばならない。⁹⁴

初期のソローキンが機械論的、行動主義的であると特徴づけた、冒頭のイサジュの批評は、上記のことを指している。ではこのとき、心理の問題はどのように処理されたのであろうか。あらゆる行為が現実^にに成立しているからには、意識や心理的要素は、かならず入っているのはまちがいない。迷妄におちいる危険を理由に、それをいっさい切り捨ててしまうのは、また別の意味での危険性を含んではいけないだろうか。つまり社会の表層でみられる行為だけをすくいあげ、そこに含まれているであろう心理的意味については、禁欲的に語らないでいくという研究方針が、^{まちが}陥りがちな皮相な社会調査についてソローキンは危惧しているのである。第3章をしめくくるにさいして、後年のソローキンを髣髴とさせるこういう言葉を残している。

研究対象となる現象の分析がごく完全なものとなるためには、外側から観察できる事実（人々の行動）とだけ関係する客観的方法とならんで、人々の心理的経験の分析へと向かう内観法（метод интроспекции）が補助的方法として許容されうる。一連の現象の解釈にこの方法を導入することで、客観的観察のデータをいささかも損なうことのない多くの現象の理解が容易になるし、明解なものとなる。⁹⁵

ここには客観と主観を分かちことなく扱う方法が、心理的行為と心理的経験という相互作用の別様の表現で論じられている⁹⁶。以上のように社会学の方法論を確定したあと、ソローキンは「社会分析論」へとむかう。

2 相互作用から統合主義へ

2-1 『社会学体系』における相互作用の要素分析

社会現象というきわめて客観的なことがらを、主観を分かちことなくとり扱っていくとする姿勢は、あくまでも心理に根ざす行為ないし経験である相互作用

用を論じることで保たれている。これのはっきりとあらわれているのは、「相互作用の要素分析」と題される『体系』第4章⁶⁴である。そこではおもに相互作用の特徴づけがなされる。この章はロシア時代のソローキンの基本的考え方をうまくあらわしているばかりでなく、その後も一貫して論じられている重要なモチーフを吐露している部分ということもあり、これより詳しく論じていくことにしたい。まずは目次に目をとおり、構成を把握しておこう。

第4章 相互作用の要素分析

第1節 最単純社会現象 (простейшее социальное явление) としての相互作用／第2節 相互作用現象の要素／第3節 相互作用現象の要素としての諸個人／第1項 諸個人の基礎的な生物学的特性と心理的特性／第4節 相互作用現象の要素としての行為／第1項 刺激物としての人々の行為／第2項 行う行為と行わない行為／第3項 影響が持続する行為と影響が瞬間的な行為。強い影響する行為と弱く影響する行為／第4項 意識行為と無意識的行為／第5節 相互作用現象の要素としての伝導体／第1項 相互作用の伝導体概念とその役割／第2項 相互作用の伝導体の分類／第3項 伝導体の回路。伝導体の回路の接触部としての人間／第4項 相互作用伝導体といわゆる「物質文化」／第5項 経験と伝導体の相互関係／1. 問題／2. 伝導体の発生理由／3. 伝導体はいかに発生するか。それらの無意識的発生と意識的発生／4. ある経験がある伝導体によって表現されるのはどのような条件下にあってか／5. 行動と心理的経験に与える伝導体の反作用の影響

ソローキンはここで、複雑多様な社会現象の仕組みを理解するために、その分解と簡略化の作法を示そうとしている。しかし一般的社会現象として、たとえばギディングズのソキウス (*socius*) のような、自然科学を模した極微単位(アトム)を想定してみても、あるいはその変奏としての原始社会を設定したにしても、それらはあらかた徒労に終わるほかないという。それはなぜだろうか。

個体はたとえ何万と集まっていたにしても、それが孤立しているのであれば、社会現象の極微単位でもなければ、それを構成しているわけでもない。個体が単独で行うあらゆる営為というものは物理学的、生物学的、心理学的な関心とはなりえても、社会学の対象とはなりえないからだという⁶⁵。いくつか出されたモデルを考察したあとで、ソローキンはこう述べている。

2人ないしそれ以上の個人の相互作用は、社会現象の一般概念であり、また社会現象のモデルとなりうる。このモデルの構造を研究しながら、あらゆる社会現象の構造までも認識することができる。相互作用を構成部分

に分解することで、われわれはもっと複雑な社会現象を、まさしく部分へと分解できる。⁸⁹

人間関係の部門においては、なにが単純な事実であるというのか、またどんな現象が社会現象の複雑な仕組みの小さなモデルの役目を果たすことができるか。こういう問いへの解答のつもりでもちだされたのが相互作用であったわけだが、ソローキンはこの相互作用現象を3つの構成要素に分解している。

それぞれ(1)相互の経験と行動を条件づけている2人以上の個人の現れ、(2)相互の経験と行動を条件づける行為の現れ、(3)ある個人から別の個人へと動作ないし行為の刺激を伝える伝導体の現れである⁹⁰。端的に言えば、相互作用する「個人」とその「行為」、そしてそれらに働きかける「伝導体」の役割、これが社会現象の三要素だという。この3つの部分の組み合わせ方こそが「無類の実在」であり、社会学はこれを「特殊な実在 (реальность sui generis)」ないし「独特のシステム (особая система)」として扱うのだとソローキンは論じている。これは他の科学からみた社会学の独自性とも関わる問題であり、ソローキンがあくまでもこだわりつづけた社会学の独立性の論拠であった⁹¹。ともかく上の3つの要素について、微に入り細を穿つ分析を彼は示している。それらをこれから順にみておきたい。

2-2 主体としての個人

まずは相互作用の主体である「個人」について。ソローキンはパヴロフにしたがい、人間の生物学的特性のなかに、分析によって成り立っている分析活動、有機体で動いている刺激の部門、そして有機体と分析された刺激との連鎖により成り立つ連絡活動といった、より高次の神経系統の機能とを含めている。相互作用の主体である個人には、刺激に反応する発達した器官、すなわち受信器官 (рецептор)、伝導器官 (кондуктор)、反応器官 (эффектор) がそなわっていて、またその器官に伝わった刺激に反応して自動的に行為を行う能力をもつ⁹²。

さらに人間の心理的特性については、認識、感情、意志作用という精神の経験の3種を区分している⁹³。それぞれの間にある物理的、心理学的、社会的な相違により個人は影響を受ける。その人間の基本的欲求は10個を数える。すな

わち(1)飢えや乾き、(2)性、(3)個々の自己防衛の欲求、(4)集団自己防衛の欲求(потребность групповой самозащиты)、(5)運動の欲求、(6)呼吸や睡眠や余ったエネルギーの発散(遊び)の欲求がある。またその他の生理的欲求としては、(7)自分に似た人との交流の欲求(потребность общения с себе подобными)、(8)知的活動の欲求、(9)感動経験の欲求、そして(10)意志の活動の欲求があり、この最後のものに名声、権力、正義、犠牲などの欲も含まれている⁹⁾。意味や価値や規範という刺激を人間が受けたり発信したりするのは、この心理的特性からくるものである。

それではこうした刺激としてとらえる人間の行為とは、いかなるものになるのであろうか。「行為」を相互作用の要素として分析することで、まずソローキンは個人の単なる経験が他の個人の刺激になることはあっても、相互作用を維持しているのは、あくまでも個人の行為であることを主張する。それを分類すると、「行う行為(асты делания)」と「行わない行為(асты неделания)」とにわかれる¹⁰⁾。行う行為はたくさんの運動を抱懐している、ありとあらゆる行為であり、また行わない行為は外的運動となってあらわれてこないか、もしくは観察できないくらいに微妙な行為であるかのどちらかである。行わない行為とは忍耐の行為、ないしは再現のあまりない行為にはかならないのだが、ともに人間行動の刺激であり続ける。

ところで「行わない行為」の主張のなかで興味をひくのは、行動が表だってあらわれていないにもかかわらず、それが積極的な行為でありうる場合をソローキンが論じているところである。それは「慎みや忍耐の行為(акты воздержания и терпения)」である。積極的な行為が表面にあらわれていたり、あるいはその反対に消極的な行為が表にあらわれなかったりするの、ごくあたりまえのことで説明する必要はない。それに対して寛容という態度は、いささか複雑な精神構造といわなければならない。ソローキンが例示するのは、いっけん消極的な態度ともとられかねない「山上の垂訓」とか『カラマーゾフの兄弟』のゾシマのような愛による受容である。これは自分が受けた、なんらかの苦悩や憎悪や敵愾心を暴力ではなしに、愛の包容力で受け止めようとしている姿勢のあらわれである。これなどは外面的行動となってあらわれてはこないものだけれども、それでも積極的であることにはかわりない行為である¹¹⁾。

したがって内面を無視して外面だけをとらえようとする研究が陥る陥穽もこ

こにある。すでに論じた心理の処理の問題、あるいは心理的経験という言葉の意味、そしてそれを研究する彼の方法は、こういう繊細な行為においてその有効性が発揮される。

2-3 行為の媒体

相互作用の2つめの要素である「行為の媒体」は、重要なわりには、どの社会学者によっても一言も語られたことがないとソローキンは不満を述べている。したがってこの要素についての分析はこのほか微細に詮索される⁹⁰。行為の媒体について、ソローキンはこういうことをいっている。「所定の個人からくる刺激によるこれら全ての手段は、他の個人に伝えられたり、由来したりする」と。一個人は他人の心理的経験を直接知ることはできないし、また他者の外的、非心的現象を介することなく、そうした経験を想像することもできない。「魂の交流はきまって非心的代理人ないし媒体による調停を通じて成就される。後者〔媒体〕のない心理的相互作用はまったく見当もつかない」。距離や時間の隔たりが相当のものであるにしても、物理的、精神的に人々は互いに相互作用していることに気づく。たとえば「生者と死者との間にも相互作用はありうる」とソローキンはいう。そのような事実はいかにして可能であろうか。死者との相互作用の発生になくはならない条件を考えてみると、それは「その相互の行為と反応を相互作用のシステムの成員に伝える」媒体の存在であることがすぐに分かる。そうした媒体は、たとえば(1)有機体に物理的反応を生む棒や剣の一振りのような純粋な「物理的伝導体 (физические проводники)」、(2)騎士を騎士たらしめる精神や経験を伝承する棒や剣の一振りのような「伝導体記号 (проводники-символы)」ないし「伝導体信号 (проводники-сигналы)」に二分することができる⁹¹。後者のほうが人間の相互作用においては、いっそうありふれた伝導体であって、心理的経験を表現したり、心理的経験を解釈したりするときには、そうした伝導体の機能がなくてはならないものとなっている。

もちろん上記のことは、前章で述べた人間の心理を外面的行為においてとらえようとする姿勢を、より正確にいかえたものに他ならない。

2-4 相互作用現象の要素としての伝導体

すでに論じたように媒介の種類は豊富であるが、おおまかには物理的なものと象徴的なものとにわけられる。たとえば村八分の事例で説明してみよう。「故郷を石もて追われる」場合の石が物理的なものにあたる。また無視という無言の重圧という態度であればそれは、物理的にはなんら威圧を与えないにしても、ある感情が伝達されているので、そこに象徴的媒介があるといえる。以上のような性質をもつ伝導体にたいしソローキンは、音の伝導体、光と色の伝導体、機械的伝導体、熱伝導体、身体運動的伝導体（проводники двигательные）、化学的伝導体、電氣的伝導体、物質的・物的伝導体（проводники вещественно-предметные）という具合に列挙している⁹⁰。

この分類がいささか論理的に荒っぽいとは認めながらも、それでも人間の相互作用には不可欠で、一般的で、ある種の重要な媒体を示しているので、その意図を達成しているとソローキンは考えている。実際、人間の相互作用はそのような媒体の連鎖によって生まれ、しかも非常に多くの場合、別の個人がそうした数ある連鎖の中継の役目を果たしている。その組合せとして、こうした媒体がいわゆる物質文化を表している。これについて繊細な議論を展開しているのが第4章第5節「相互作用現象の要素としての伝導体」⁹¹である。

上に列記した分類について、いくつか具体例をあげながら敷衍しておきたい。「音の伝導体」について。たとえば大都市の騒音が人間の身体や精神へ影響するというような場合がある。しかしさらに重要なのは象徴的媒介としての音、とりわけ言葉や音楽などの役割である。思想の伝達はもちろん抽象的思考すら言語の介在なくして行うことはできない。その言語のなかでも口述が中心であり、会議、市場、教会、過程、教室、裁判所では口頭伝達が重要な社会的役割をはたす。さらに音声の高低により多様な刺激を与えることもできる。バラモン教では言葉が世界を支配する魔力であるとされ、聖書では「はじめに言葉ありき」と記されている。

それから音楽が音の伝導体に数えられるのはいうまでもない。これは言葉にできない感情、情緒、気分、それに精神状態をも表すのに適している。鍵盤を叩くだけで喜怒哀楽の表現を行うこともできる。あるいはマーチは陽気な気分をあらわすほかに、行進や運動や舞踊の気分を発動させる。さらに時を伝える鐘や砲声、警笛、汽笛、ベルなども意味を伝達する音の伝導体である⁹²。

「光と色の伝導体」について。記述された言語、たとえば書物などはこれにはいる。ダンツェルは、文明が高度になるにしたがい、それだけ過去の経験や業績に依存しなくてはならなくなるという。それから絵画の色彩、信号機、喪服の黒といったものは、独特の意味、価値、規範を伝達する、光と色の伝導体のわかりやすい例といえる⁹³。

「身体運動的伝導体」について。たとえば身振り、手振り、しぐさなど。うまく体系化されたものとしては、宗教や国家において執り行われる儀式などにまで発展する⁹⁴。

「機械的、熱的、化学的、電氣的伝導体 (проводники механические, тепловые, химические и электрические)」について。「熱的伝導体」としては、熱エネルギーの他者への影響がある。ここで想定されているのは、たとえば放火や砲撃である。これらの行為を行う者は、他者に恐怖感や危害や死といったものをもたらす。また冷暖房があたえる人間の肉体的、精神的影響もこれにくわえてよい。さらに「力学的伝導体」としては、打つ、突く、刺すなどの行為がある。殴打や殺傷といった暴力沙汰から、手術や抱擁といったものにまでおよぶ。次に「化学的伝導体」は医療行為や衛生関連の仕事から毒殺といったものまでがこれに関係する。それから「電氣的伝導体」には電話やラジオなどがあるが、おもに物理的伝導体として働くことが多い⁹⁵。

「物的伝導体」について。これは、あらゆる物質文化を盛り込んでもいいぐらいにひろい範疇である。無雑作に挙げれば国旗や指輪や寺院などがあり、なかんずく貨幣は重要である。さらにいえば、寺院の絵葉書のように、ひとつのシンボルがまた別のシンボルを生んで、しだいに意味の重層性をましていく特性を物的伝導体はもっている⁹⁶。

3 伝導体の作用と反作用

しかし伝導体は人間が作りだし、使いこなすというだけのものではない。それは「独自の生命」を獲得して、自ら活動しだす。「伝導体は、その存在を人間に依存しているにもかかわらず、それがひとたび作られると、人の行動や心理状態に強い反作用的影響をおよぼすのである」⁹⁷。それはどういったふうであろうか。ソローキンは「一般的反作用」と「物神化とその反応」の2つをあ

げて説明する。

まず「一般的反作用の影響」について⁴⁰。伝導体ないし媒介は「機械仕掛けのように (механические)」機能する、とソローキンがいったのはこれをさしている。つまり媒体の自己組織性といってもいいであろう。昔の人間が形成した都市とか村が、全然関係のない今の人間の行動を規定するであろう。あるいは道路や教会でもいい、それらは人々の相互作用の結果として生じた建造物のはずである。しかしその相互作用とは直接関係のない人々へもこの建築物は作用をおよぼす。これらがすなわち伝導体の反作用である。

たとえば「身体運動的伝導体」の反作用をみてみよう。「身振りの機械的再生産は習慣的に行為者の精神に反作用的影響をもつ」。情緒的なものが行動としてあらわれる、ということは普通に想像できることであるが、ソローキンはそれとは逆に態度や行為が感情へ働きかけることもあると指摘する。これによればロヨラやパスカルが考えたように、宗教心をおこさせるには宗教上の顕在的行為を行わせるのもひとつの手であることになる。同様に怒りの演説が、人に怒りの感情を発動させるというパークの発想も、あるいは儀礼を重視する儒教の教えも、これと類似することがらを表現している⁴¹。くわえて場所や人物のまとう装束もこれと同じような機能をはたす。僧衣、ドレス、囚人服、喪服といったものは、それを着用しただけで、ある種の気分をかもしだす⁴²。

以上のことからさらに、「媒介の物神化とその反応」⁴³ というところにまで、議論を広げていくことができる。反作用的影響にあるていどの時間の経過がくわわって定着がすすむと、媒介の物象化ということがおこる。国旗は布と棒切れであり、紙幣は紙切れとインクであるといいきってしまうこともできる。にもかかわらず、たとえば国旗に殉じることもできれば、反目することもできる。それだけ国旗のなかに意味、価値、規範が充溢しているということの証左である。ソローキンは、パレートがいったことであるがと注記したあとで、一例として「神」という言葉について考えている。この言葉は、「抽象的なものに名称を与えられることで、客観的実体に変えられた」ときに、「高度の人格化」がなされたものだとして説明している。ほかに「進歩」「民主主義」「平和主義」「社会主義」という言葉についても同じことがいえる⁴⁴。

音や光や色の伝導体、身体運動的伝導体、そして物質の物神化にも似たところがあるのだろうが、とりわけて人間の物神化が際立って目につきやすい。ロー

マ皇帝、国王、独裁者、あるいは革命の英雄にもその傾向はある⁵³。

以上、相互作用の要素、とりわけ伝導体のはたらきについて詳しくみてきた。ソローキンは、この『体系』第4章「相互作用の要素分析」を次の文章で締めくくっている。

相互作用現象は個人、その行為、伝導体という3つの要素から成り立っている。

これらについて述べてきたことの全体から結論として導かれるのは、相互作用現象における意味、価値、規範である。その現象の分析の開始時点で伝導体のみを採用し、その意味を欠いてしまったとしたら、疑いをはさまないわけにはいかない。

相互作用の要素のかなり大雑把な分析をわれわれはここで終えることにする。

以上述べたことはこういうことである。相互作用現象が3つの要素からなる以上、相互作用現象の複雑な複合体であるあらゆる社会現象は、まさにこのために上に記した要素全てをもっていなければならないのである。⁵⁴

展望

『体系』の方法論的部分のあらましは以上のようなところである。いまいちど本論を振り返ってみると、いくつかの課題が残されていることに気づく。まず、「はじめに」でも触れたとおり、ソローキンが統合主義を完成されるまでの思想形成の経緯の問題がある。脚注にいくつか比較の視点だけは記しておいたが、これをさらに展開していくことで、ソローキンの学問と思想はより明確にできるだろう。また、ソローキンの学問態度の一貫性ということであれば、さらに時代をさかのぼって、彼の初期の哲学観を提示している論文「哲学者としてのトルストイ」⁵⁵が、参照されることになるだろう。

さて、ロシア革命をはさむ1920年前後の社会学に関する研究のひとつとして、ここでソローキンの主著を論じてきたわけだが、この時代には、彼以外にもペトラジツキーやコヴァレフスキーやデ・ロベルチといった再評価に値する人たちの名前がすぐさま思いうかぶ。彼らをはじめとするロシア社会学者を再発見

することは、今後ますます重要となっていくであろう。たとえば最近になって、彼らの著作はあいついで復刻されているのも、その兆候のあらわれである⁹³。こうした出版状況にも目を配りつつ、ロシア社会学を織り成す人々との思想的、学問的な関係をも含めた、ソローキンの事跡をより多面的に理解していくことが、今後の課題としてのこされている。

-
- (1) *Сорокин П. А. Система социологии. Социальная аналитика. учение о строении простейшего (родового) социального явления*. М., 1920[1993].
- (2) ドイコフは積極的にソローキンのロシア時代の足跡を丁寧にたどっている。たとえば *Дойков Ю. В.* Питирим Сорокин // США Экономика Политика Идеология 1992. С. 57-65, *Материалы Питирима Сорокина в Пушкинском доме // Отечественные архивы* 1995. № 6. С. 60-68, など。
- (3) Barry V. Johnston, *Pitirim A. Sorokin: An Intellectual Biography* (Lawrence, Kan.: University Press of Kansas, 1995). なお日本におけるソローキン研究については拙稿「日本におけるソローキン研究」『一橋研究』2000年, 第25巻第4号, 99-131頁を参照。またロシア時代の著作を紹介した論文には以下のものがある。Barry V. Johnston, Mandelbaum, Natalia Y. and Pokrovskiy, Nikita E. 'Commentary on Some of the Russian Writings of Pitirim A. Sorokin.' (*Journal of the History of the Behavioral Sciences*. Vol. 30, No. 1, p.28-42. Jan. 1994), L. T. Nichols, "Sorokin, Tolstoy, and Civilization Change," in J. Palmer Talbutt, *Rough Dialectics: Sorokin's Philosophy of Value*, Amsterdam - Atlanta, GA: Rodopi (1998), Дойков Ю. В., 1992, Питирим Сорокин // США Экономика Политика Идеология 1992. - С. 57-65., Дойков Ю. В. 1995, *Материалы Питирима Сорокина в Пушкинском доме // Отечественные архивы* - 1995. - № 6. - С. 60-68.
- (4) 統合主義については、拙稿「1930年代アメリカの文化研究の根底にあるもの—P・A・ソローキン『社会的・文化的動学』にみる「統合主義社会学」—」『一橋論叢』2001年, 第126巻第2号, 71-91頁を参照。
- (5) Wsevolod W. Isajiw, "Pitirim Sorokin's *Sistema Sotsiologii*: A Summary," *American Catholic Sociological Review* 17-4(1956) 290-319.
- (6) Isajiw, "Pitirim Sorokin's *Sistema Sotsiologii*," p. 292.
- (7) Isajiw, "Pitirim Sorokin's *Sistema Sotsiologii*," p. 290. ただし亀甲内は引用者。また以下同様。
- (8) 統合主義が完成されるまでの研究遍歴については Joseph B. Ford, "Sorokin's Methodology: Integralism as the Key," in Joseph B. Ford, Michel P. Richard, and Palmer C. Talbutt eds., *Sorokin and Civilization: A Centennial Assessment*, (N.J.: Transaction Publishers, 1995) を参照。ただしソローキンの初期の著作の検討という点では、フォードの追及はあまいように思われる。フォードは、統合主義が「種子」としては初期の著作にあらわれている、と言及しているに過ぎない。Ford, "Sorokin's Methodology," pp. 86-87. 本稿はその意味では、ソローキンの初期の著作にあらわれた統合主義の「種子」を探りあてる試みでもあった。
- (9) ただしアメリカ時代の著作との比較に関して有効な論点がある場合は、そのつど注で触れておいた。
- 00) Сорокин П. А. Преступление и кара. подвиг и награда СПб, 1914 [1999].
- 01) この2冊の書物についての伝記的資料を記しておく。『罪と厳罰』は、当初の予定では刑法の博士

論文としてサント・ペテルブルグ大学に提出されるはずのものであった。しかし本書は出版こそされはしたものの、結局、1917年の二月革命により論文の審査は先送りにされる。さらにソロキン本人もケレンスキー臨時政府の秘書に抜擢されたり、憲法制定議会のメンバーにくわえられたりと多忙をきわめ、とても審査どころではなかった。ほどなく十月革命が起きレーニン率いるボルシェビキ政権が成立してからは、政治的挫折感を胸に抱きつつペテルブルグ大学にもどり、ふたたび学生生活にはいるのであった。1919年には革命のさなかにできた社会学部の学部長に就任し、1922年の亡命の日まで、その務めをはたした。そしてその間、ようやくして先送りになっていた論文審査が行なわれる。このとき、あらたに稿を書き改め、『体系』でもって執り行われた口頭弁論は、1920年に審査委員の満場一致で博士号を認可される。P. A. Sorokin, *A Long Journey* (New Haven: College & University Press, 1963) p. 92.

02) *Сорокин, Преступление и кара* С 57.

03) *Сорокин, Преступление и кара* С 58.

04) なおこの論旨と『社会的・文化的動学』（以下『動学』と略記）の冒頭とを比較してみると、相互作用の原理から統合原理への用語上の移しかえがなされているだけで、根本的には同一の研究姿勢がうかがえる。『動学』の冒頭は以下にはじまる。「全ての文化はまるごと統合しているのだろうか、そしてそこでは根本的な部分が付随的ではなく、各々が残りのものと有機的に関連しているのではないか。それとも単にそれは一緒に放置されているという事実以外にはなにもない、偶然一緒に漂っているか、空間的隣接のみで統一している、文化の客体、価値、そして特徴のただの空間的集積なのだろうか。最初の文章にしたがえば、それでは、なにが統合原理 (principle of integration)、すなわち本質的特徴の全てが集中する枢軸なのか、なぜそうした特徴があるのか、その特徴とはなにか、今あるような特徴が生きているのはなぜなのだろうか。二つめの文章ならば、なぜ文化の客体と価値の寄せ集め (conglomeration) の一種が所定の領域では起きるのに、別の領域では違った種類があらわれるのか。どのように、またなぜ時間の経過につれてある寄せ集めは一定方向に動くのに、他のものは全く別の方向へ変化するのだろうか」P. A. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols. (New York: American Book Co., 1937-1941). Vol. 1, p. 3. この一文に『体系』との類似性を見出すとはたやすいであろう。

05) *Сорокин, Преступление и кара* С 59.

06) *Сорокин, Преступление и кара* С 59-61.

07) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 76.

08) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 102-136.

09) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 122.

20) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 135.

21) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 136.

22) なおここで、この主張とアメリカ時代の主著『動学』での視点とを比較しておきたい。『動学』で彼は、「文化統合の高い程度を想定するときなら、必ず最高水準で全ての文化に適應でき、したがって因果的方法を補うに違いない論理-意味的方法」を採用し、この2つの方法を併用してこそ「真の統一体を含む構成要素の性質を把握できるシステム」に整理することができるという。すなわち『体系』で示された客観的方法というのが、のちの因果-機能的方法にいかえられたもので、内省的方法というのが論理-意味的方法としてより鮮明に示されたものである。Sorokin, *Dynamics*, Vol. 1, p. 47.

23) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 137-259.

24) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 139.

25) *Сорокин, Система социологии* Том1., С. 141-142. 後年、「意味的相互作用」というふうに相互作用という言葉がいかえられ、むしろ意味のほうに力点がおかれるようになる。P. A.

Sorokin, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics* (New York: Harper, 1947) (鷲山丈司訳『社会学の基礎理論—社会・文化・パーソナリティ』内田老鶴園, 1961) p. 40. (邦訳128頁). 意味ある相互作用とは、動植物の行う相互作用とは違う。親鳥が雛鳥にえさを与える相互作用のことを「意味ある」行為とは呼べない。たとえば母が乳飲み子へ乳を与えることで、そこに、なんらかの情感がたちこめるような、そういう働きのことを「意味的相互作用」という。

- 26 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 142. なお後年の『社会・文化・パーソナリティ』(以下『パーソナリティ』と略記)の場合、「(1)主体としての人間(human beings)」、「(2)その人間が交換する非物質的な意味と価値と規範」、「(3)それを客体化する媒介(vehicles)と伝導体(conductors)」という類在的作用と物質的現象」という言葉に置き換えられる。Sorokin, *Society, Culture, and Personality*, pp. 41-42. (邦訳132頁).
- 27 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 142
- 28 この議論はのちに「社会科学の独立宣言」として主張されるものと同じである。P. A. Sorokin, "Declaration of Independence of the Social Sciences," *Social Science* 16 (Chicago: American Sociological Society, 1941): 221-29. この論文は、とりわけ1920年代以降の社会科学を自然科学へと近づけようとする風潮に一矢報いようとするソローキンの立場表明でもあった。
- 29 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 143.
- 30 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 145-146.
- 31 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 162.
- 32 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 165.
- 33 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 166.
- 34 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 181-186.
- 35 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 184.
- 36 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 187.
- 37 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 172-259.
- 38 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 188-192.
- 39 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 192-196.
- 40 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 196-198.
- 41 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 199-201.
- 42 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 201.
- 43 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 242.
- 44 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 242-251.
- 45 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 246-247.
- 46 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 250.
- 47 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 251-259.
- 48 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 257.
- 49 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 257-258.
- 50 Сорокин, Система социологии, Том1., С. 259. なお、アメリカ亡命後にソローキンが愛用するようになった表現に、「不可分の三位一体」というのがある。ここではこの概念は用いられていないけれども、それとまったく同じ趣旨のことが述べられている。「三位一体」とは統合主義の合言葉ないし符牒のようなものであった。引用文にある相互作用の要素である、個人、行為、伝導体の「複合体」というのは、統合主義でいうところのパーソナリティ、社会、文化の「三位一体」にほかならない。Sorokin, *Society*, chap. 3. (邦訳第3章).
- 51 Сорокин П. А Толстой как философ// *Вестник психологии крими антропологии и гипнотизма*. 1912. Вып 4-5. С80-97.

62 少しづつではあるが最近、ロシア社会学史に関する研究があらわれている。たとえばロシア社会学史に *Медушевский А. Н. История русской социологии. М., 1993.* *Миненков Г. Я. Введение в историю российской социологии. Минск, 2000.* *Голосенко И А и Козловский В. В. История русской социологии XIX-XX вв. М., 1995.* があり、書誌には *Голосенко И. А. Социологическая литература России второй половины XIX- начала XX века. М., 1995.* がある。